

行政が介護者ケアの仕組みを作って！ 家族介護に給付金があれば助かる家も

介護保険に助けられている家族がいる一方、介護保険とつながれない家族も。実は、介護の辛いところは日々の細々したことだったりします。そこで、当事者の生の声をお届けすべく、本誌の「うらわか介護」連載を執筆、介護歴21年の岡崎杏里さんと、介護歴5年の編集部員Aが語り合いました。



岡崎杏里さん

おかざきあんり ●ライターエッセイスト
本誌にて「うらわか介護」連載中。



編集部員A

●本誌編集者
本誌での仕事歴1年3カ月

岡崎 初めて介護保険を使ったのは2003年。若年性認知症の父の介護をしていた母が卵巣がんになり、急に両親2人分の面倒を見ることに。未経験のストレスに過呼吸で何度も倒れる中、元看護師の知人が心配して、「お父さんはまだ50代だけど、脳血管疾患は40～64歳の人でも介護保険が使える特定疾病のはず」と教えてくれました。

介護保険は年齢的に無理だと思っていたので驚いて役所に駆けつけると、事業所一覧のリストを渡され、上から順番に電話をかけました。どこも手いっぱいまで断られ続け、ケアマネ本人が電話に出た事業所で泣きついたら、本当は定員いっぱいだけだからと受け付けてもらえて。

「ケアマネ」が何か分からなかった

編集部員A 私も4年前、がんの末期に父が在宅医療を始めることになり、会社が休みの土曜日に地域包括支援センターにいくと、「まずはケアマネね」と土曜日に開いていた事業所に包括職員が電話をかけ、そこで決めてくれました。私はケアマネが何か分からず、言われるがまま。家から近い在宅医が良いと伝えると何枚かパンフレットをくれたので順に電話です。何の情報もなく苦労しました。岡崎さんは介護保険が始まったばかりで、現場はより混乱していたのでしょね。

岡崎 当時は地域包括が無く、私も何の知識も無かったので、「身体介護と家事援助がある」と説明されても意味が分からなくて。父は糖尿病で服薬が必要で、薬を飲ませるのは身体介護だから費用が高くなると聞いて、「何で？」と。

編集部員A 最初は何の介護サービスを利用しましたか。

岡崎 父は決まった時間に食事をしたい人。当時、会社員だった私にはその対応が難しかったのでケアマネと相談して、訪問介護で食事援助してもらいました。食事のことで父とケンカが絶えなかったので、ヘルパーに父が希望する時間に料理を提供してもらえたことはとても助かりました。

編集部員A 私の父も一人暮らしだったので脳出血後に食事援助してもらいましたが、料理上手なヘルパーが少なく「俺の料理のほうがうまい」と断ってしまいました。食事援助は買い物から始めて1時間がルールなので、時間ばかりかかって。あれならお弁当を買ってきてもらえば良かった。

岡崎 家族が同居していても、ヘルパーは利用者1人分しか料理が作れない。だから驚いたのは、ヘルパーがカレー用の小さなスプーンで味噌をすくって、1人分の味噌汁を作っていたこと。気の利いた(?)ヘルパーが「1人分を作ったつもりが、少し残ってしまいました」と、帰宅した私の分まで味噌汁ができていたこともありました(笑)。

編集部員A 時間が経つと情が移りますよね。

岡崎 娘の私だと距離が近いので争いになることも多かったのですが、第三者であるヘルパーとは良好な関係を築き、若くて優しい女の方が来ると嬉しそうにしていました。

その後、ケアマネの提案で父は若年障害者のための地域活動センターに通い、60歳になったことを機にショートステイやデイサービスを利用するようになりました。本人が嫌がるかと最初は心配でしたが、スタッフの雰囲気もよく、久しぶりの旅行のような感覚になったみたいで、楽しんでくれて。